

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K18929

研究課題名（和文）思春期における自尊心低下のリスク解析と自尊心低下による問題行動へのリスク解析

研究課題名（英文）Low self-esteem in adolescence and risk analysis of problem behavior due to low self-esteem

研究代表者

水野 君平（MIZUNO, KUMPEI）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90862532

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：二次性徴到来の個人差は思春期に低下しやすいと言われる自尊心の変化幅自体には影響しないことが示された。また、低い自尊心は問題行動を招きやすいが、自尊心自体の高低によって説明されることであり、発達の変化は問題行動に影響しないことも示された。ただし、本研究にはいくつかの限界点もある。最終的にサンプルサイズが少なかったことによって詳細に分類できなかった可能性や、詳細な経時的変化を追いきれなかったなどがある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究の限界点はいくつか存在するが意義としては以下がある。第一に、成長スパートを指標とした場合、二次性徴到来の個人差が直接的には子どもの自尊心発達変化に影響しないことから、二次性徴の早さ・遅さによって様々な周囲との違いを子どもは経験するが、それが自己に対する肯定的な価値を大きく揺るがさないことが示唆された。第二に、急激な自尊心変化は現れにくく、横ばい～緩やかな低下のトレンドが明らかとなり、約半数の子どもは高く安定した自尊心を持っており、一部の子どもに見られた安定して低い自尊心が問題行動のリスクとなっていた。むしろ安定して低い自尊心を持つ一部の子どもに対してどう保証していくかが重要と示唆される。

研究成果の概要（英文）：It has been demonstrated that individual differences in the onset of secondary sexual characteristics do not affect the magnitude of changes in self-esteem, which tends to decrease during adolescence. Furthermore, while low self-esteem is prone to lead to problematic behaviors, these behaviors can be explained by the levels of self-esteem themselves, rather than by developmental changes. However, this study has several limitations. The final sample size was small, which may have hindered detailed classification, and it was challenging to track detailed temporal changes.

研究分野：心理学

キーワード：自尊心 思春期 二次性徴

1. 研究開始当初の背景

思春期は児童期に比べ問題行動や心理的不適応が起こりやすい時期だとされている(平石, 2016)。このような問題行動の原因として養育や仲間関係などが挙げられるが、思春期の発達に関連した要因では自尊心(「自己肯定感」や「自尊感情」を含む)と第二次性徴がある。

自尊心は問題行動や健康に関するアウトカムを複数、長期間予測するといわれている。例えば、子どもの自尊心が低いことはうつ病(e.g., Orth et al., 2014)、不安(e.g., Sowislo & Orth, 2013)自殺念慮(e.g., Manami & Sharma, 2016)など、様々な問題行動のリスクとなる。特に、思春期には生涯発達の中で自尊心が低下する時期であると国内外の研究から示唆されている(Ogihara, 2016; Robins & Trzesniewski, 2005)。より詳細に、中学校3年間を追跡した加藤他(2018)でも、中学1年生の1学期から2年生の3月期まで徐々に自尊心が低下することを報告している。思春期には誰も自尊心低下を経験する時期であるが、全員が健康を損ない、問題行動を起こすわけではない。これを明らかにするためには平均的な傾向ではなく推移を類型化する必要があるだろう。これについては加藤他(2023)が自尊心変化のパターン化を試みているが、研究としては多くはない。その他、自尊心の低さではなく不安定さは評価に過敏になり、自分に対する不安に繋がると指摘されている(Kernis et al., 1989; Kugle et al., 1983; Rosenberg, 1986)。そのため、不安定な自尊心自体も健康的な発達とは言えないだろうし、不安定な自尊心は問題行動と関係すると考えられる。

また、第二次性徴の到来の早さと問題行動に関しては、第二次性徴が早い子どもほど問題行動を起こしやすくなるとされ(Negriff & Trickett, 2010)、メタ分析からも同様の結果が得られている(Ullsperger & Nikolas, 2017)。この原因には現代の身体的成熟と心理社会的成熟の差異によって早期の第二次性徴が問題行動を引き起こすとされている(Moffitt, 1993)。しかし、これらは1時点における自尊心の高低に対する検討にとどまっており、第二次性徴の早さによる自尊心の発達の变化への影響は検討できていない。

これらを統合すると、第二次性徴の到来の個人差が自尊心の発達の变化の類型化に影響するか、そしてその類型化が問題行動と繋がるのか、という繋がりが十分に明かされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、思春期における第二次性徴が自尊心の発達の变化に対してどう影響を及ぼすか、どのような自尊心の発達の变化が問題行動のリスクとなりえるのかを検討することである。すなわち、本研究は、自尊心の発達の变化をキーにして、第二次性徴と問題行動の関連性を検討する。この目的を達成するために、北海道大学環境健康研究教育センターで実施されている出生前向きコホート研究「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ(以下、北海道スタディ)」に参加している思春期の子どもを対象とした縦断調査を行い検討する。

3. 研究の方法

2020年時点で北海道スタディに参加している12歳の子どもを4回追跡したデータを使用した。北海道スタディで行われている年1回の縦断オムニバス調査(調査に参加しているすべての保護者および、場合によりその子どもにも年に調査票を1回送付)の中に、本研究ではRosenbergの自尊心尺度(山本他, 1982)を追加して尋ねた。なお、北海道スタディに関わる研究者および担当事務との協議で一部の項目(例:「良い素質」など)について、国語辞典を参照して意味の表現の補足を付けた。自尊心調査票では2020年度に1時点目、2021年度に2時点目の調査票が送付され自尊心の回答も求められた。その後参加者にはランダムに2022年度・2023年度のどちらかに自尊心調査票が付随した調査票が送付され、自尊心の回答も求められた。そのため、全体では4時点のデータがあるが参加者は最大3回回答したことになる。分析では欠損値推定を行い4時点の変化を分析する。

その他、第二次性徴の到来の個人差については北海道スタディで蓄積されたデータ数が多いことから身長データをベースに算出された成長スパート月齢データを使用した。問題行動については2022年度・2023年度のオムニバス調査で同梱されていたSDQ(Goodman, 1997)の日本語版(<https://ddclinic.jp/SDQ/index.html>)の5つの下位尺度のうち4つの下位尺度を使用した。具体的には外在化問題行動(行為の問題、多動・不注意)と内在化問題行動(情緒の問題、仲間関係の問題)に合計得点を集計して指標として使用した。最終的に分析対象として欠損値を含んだ状態で、2020年時点で12歳の2,018名のデータを使用した。

4. 研究成果

まず、Mplus8を用いて4時点の自尊心データで潜在クラス成長モデル(LCGM)による縦断的变化に関わる分析を行った($n=745$)。LCGMでは、潜在成長曲線モデルと同様に時点間の得点変化について切片と傾きを推定するとともに、得点変化の傾向をいくつかのクラス(ただしクラス内は分散がないもの推定する)に分類することができるものである。欠損値推定には完全情報最尤推定法を用いた。自尊心の変化の分類を2クラスから増やしていき、クラス数が $k-1$ と k

の場合を比較した検定であるブートストラップ尤度比検定 (BLRT) で有意にならなかったクラス数の1つ前のクラス数 ($k-1$) で最終的なクラスとした。結果, 4 クラスを最終的なクラス数とした (Table1)。また, 4 クラスとした場合のクラス所属確率と人数および切片と傾きの推定値は Table2 のとおりであった。

Table1
潜在クラス成長分析 (2 クラスから 5 クラス) を推定したモデル指標

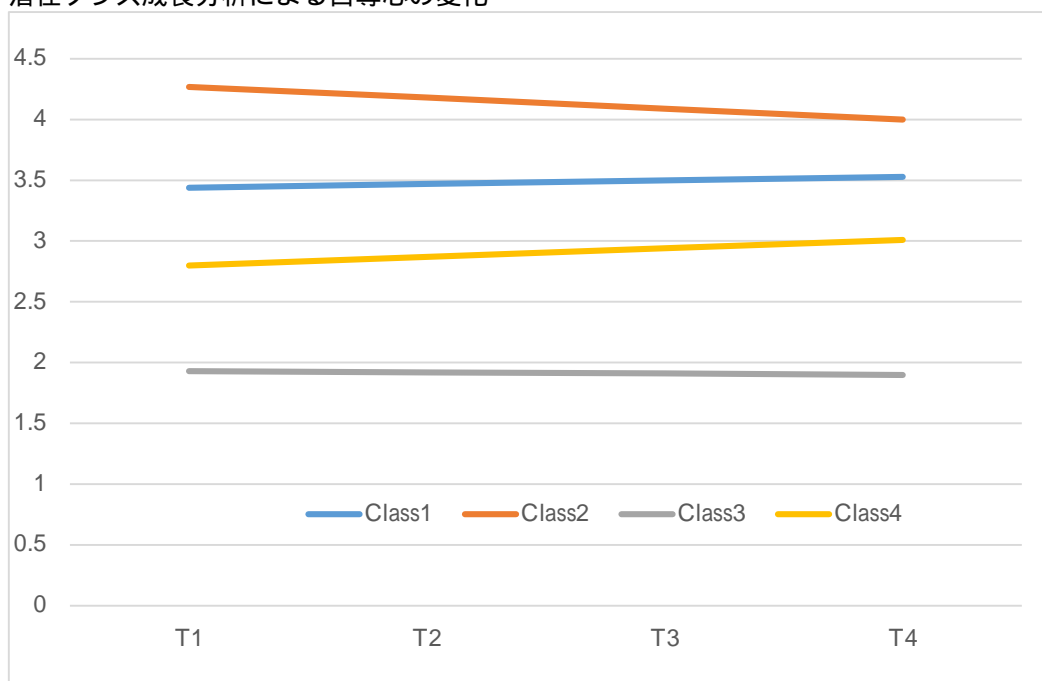
クラス数	BLRT	エントロピー	AIC
2	$p < .001$	0.62	3038.64
3	$p < .001$	0.71	2961.89
4	$p < .001$	0.62	2949.55
5	$p = .35$	0.60	2949.81

Table2
4 クラス推定した場合の潜在クラス成長分析の推定結果 ($n = 745$)

クラス	人数	所属確率	切片 (平均)	傾き (平均)
1	295	約 38%	3.44 ($p < .001$)	0.03 ($p = .38$)
2	303	約 39%	4.27 ($p < .001$)	-0.09 ($p < .001$)
3	21	約 2%	1.93 ($p < .001$)	-0.01 ($p = .87$)
4	156	約 20%	2.80 ($p < .001$)	0.07 ($p = .11$)

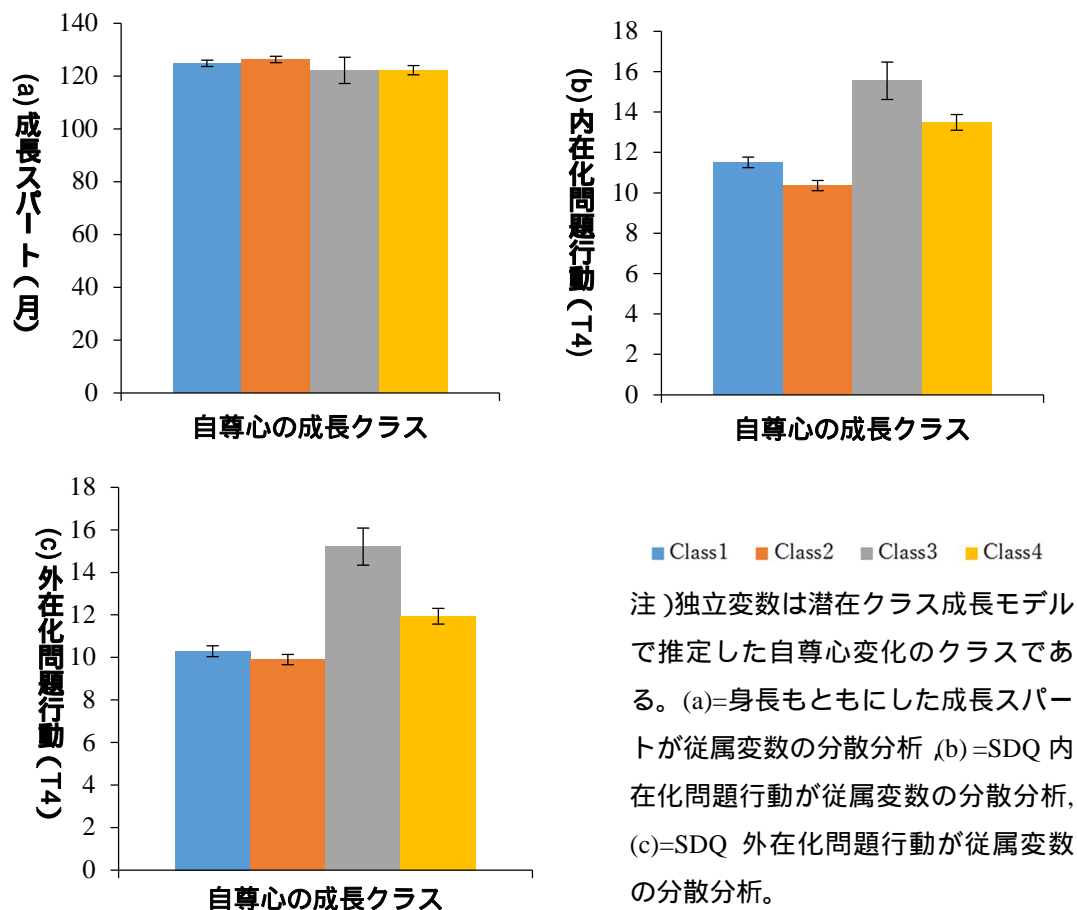
傾きの推定値が有意なものはクラス 2 だけであることから, 約 6 割の子どもは自尊心に変化がみられずほぼ横ばいであった。傾きの推定値の値自体もかなり小さいが, 唯一変化が見られたのはクラス 2 であり, 4 クラス中で一番高い自尊心が時間的にかなり緩やかに低下していくというものであった。また全体的に自尊心が高い子どもが約 7 割であり, 自尊心が低いとされるクラス 2 は 2% 程度であったことから, 北海道スタディの子どもは平均的かそれよりも高い場合がほぼ大半であったことがわかった。

Figure1
潜在クラス成長分析による自尊心の変化



成長クラスを独立変数として, 成長スパート, 4 時点目の内在化・外在化問題行動との関連を検討した。まず, 成長スパートを従属変数とする分散分析の結果 ($n=668$), 主効果は有意ではなく, 自尊心の変化と第二性徴に関連が見られなかった ($F(3, 664)=1.33, p=.26, \eta^2=.01$)。つまり, 身長成長スパートを指標とした場合, 自尊心の発達の变化に対する影響が見られなかった。

Figure2
潜在クラスを独立変数とした分散分析



注)独立変数は潜在クラス成長モデルで推定した自尊心変化のクラスである。(a)=身長もともにした成長スパートが従属変数の分散分析,(b)=SDQ 内在化問題行動が従属変数の分散分析,(c)=SDQ 外在化問題行動が従属変数の分散分析。

次に、内在化問題行動を従属変数とする分散分析の結果 ($n=290$), 有意な主効果がみられた ($F(3, 286)=22.24, p<.001, \eta^2=.19$)。Holm 法による多重比較の結果, 全ての組み合わせで有意な差が見られた。外在化問題行動を独立変数とした分散分析 ($n=290$) においても有意な主効果がみられた ($F(3, 286)=17.02, p<.001, \eta^2=.15$)。多重比較の結果, クラス 1 と 2 の間には有意な差が見られなかったが, それ以外の間には全て有意な差が見られた。内在化・外在化問題行動に共通して見られた傾向としては, 自尊心が一番低いクラス 3 が一番問題行動の得点が高く, 自尊心が一番高いクラス 2 が問題行動の得点が一番低いということであった。すなわち, クラス 2 は自尊心の緩やかな低下を見せるが, 問題行動には影響していないことがわかった。

以上の結果から, まず自尊心の変化については大きく揺れ動くといった特徴的な変化のパターンは認められなかった。12 歳時点での自尊心がベースにあり, 大きく変動するのではなく徐々に推移していた。このことから, 12 歳時点での自尊心を予測する変数が見つければ, ある程度は思春期前期の自尊心推移を予測できるかもしれない。次に成長スパートを第二次性徴の指標として使用した限りでは, 第二次性徴の到来の個人差は自尊心の変化パターン(そもそもの得点)にも大きくは関係しないこともわかった。今後は他の指標(性成熟)などで検討する必要があるだろう。最後に, 問題行動との関連では変化パターンというよりもそもそもの自尊心の高さが問題行動に影響していたことが読み取れた。自尊心は大きく変動しなかったという結果を合わせると, 12 歳時点の自尊心がその後の問題行動を予測できるかもしれない。

加えて, 本研究の成果から今後の研究や実践的課題への接続として以下のことが考えられるだろう。全体の一部ではありサンプルの特殊性が影響しているのかもしれないが, 2%程度の子どもは自尊心が低いまま横ばいに推移しており問題行動と関連していた。このような低く安定した自尊心は, 思春期の中で自己を意義ある存在と思えなくなるだけでなく, 実際に問題行動も経験する。このことから, どのような支援等があれば自尊心が低いまま推移せず高まっていくのかや, 問題行動と繋がらないのかを明らかにすることは重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 水野君平	4. 巻 61
2. 論文標題 学校心理学の展望と課題 国内の研究動向のレビューを通じた研究手法の概観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 115～132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.61.115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水野君平	4. 巻 NA
2. 論文標題 思春期の自己肯定感の発達とその規定因 親の養育態度に注目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度参加者公募型二次分析研究会 「子どもの生活と学びに関する親子調査」（パネル調査）を用いた親子の成長にかかわる要因の二次分析 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 167-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 古見 文一、西尾 祐美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 はじめての発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------